

存在命題に就て

習田, 達夫

<https://doi.org/10.15017/2543262>

出版情報 : 哲學年報. 16, pp.82-101, 1954-11-30. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

存在命題に就て

習田達夫

(一)

一般に、命題とは判断のことであるが、それは言語を用ひて表現せられる限り、主語述語形式を持つところの思惟活動であると云ふべきであらう。例へば「人間は可死的である」と云ふ命題に於ては「人間」が主語であり、「可死的である」が述語である。そしてこの例が示すところに従つて、述語である總ての性質が既に主語の内に含まれて居るとする場合には、その限りこの主語述語命題は分析命題であつて、述語は凡てその主語から分析的に導出せられるものと考へられるわけである。それ故に、一般に分析命題と稱して居るところのものは、主語の内に述語を含んで居る如きものであり、主語は常に述名辭となり得る屬性の複合せるもの乃至は集合から成り立つて居ると云ふことが出来るのである。即ち分析命題の主語は、既に述名辭となり得る名辭の集合であることが假定せられてゐるのみであつて、そこには直接にかゝる主語の「存在」が主張せられて居るのでは決してないのである。それ故に、このやうな主語から、その一つ一つの屬性を分析的に引き出す操作は何處までも所謂論理的に必然的であつて、矛盾律に従ふところのものではあるが、然しその主語となるところのものが現實に存在するか否かと云ふことは、全然問題とならな

いのである。例へば「天馬は羽を持つ」と云ふ主語述語命題に於て、羽を持つと云ふ性質は天馬と云ふ主語の内に既に含まれて居るところのものであるが故に、この命題の主張内容は必然的であるけれども、主語である天馬が存在するか否かと云ふことには、この命題は全然拘つては居ないのである。

然しながら、果して一般に判断又は命題と稱するものは存在に拘はることが出来ないものであらうか？ 否。元來命題は存在に拘つてのみ、はじめて命題としての意義を保持するところのものであつて、若し命題が上に述べた如く分析的である限り、それは單に抽象的なものに過ぎないと云ふべきであらう。既にアリストテレスの論理學に於ても、言葉と云ふものは直接に事物を象徴することが出来ると同時に、かゝる象徴としての言葉を主語と述語とに區別し、この兩者の結合構成の仕方の中に、思惟の根本的な關係を見出して居るのである。即ち事物に對應するか否かを表現する述語としての象徴が、如何やうに主語たる事物と結合するかを考察して、そして述語をこの主語に結合せしめるその仕方であるところの「」である」と云ふ連辭の意味を分析し、そこからこの述語の主語への結合の仕方、即ち存在の仕方に關して十個の範疇を擧げて居るのである。

(1) Aristoteles: *Perihemenias*, Erstes Kapitel: 16 a.

(2) Aristoteles: *Erste Analytik*, Siebendundreiszigstes Kapitel: 49 a. 及び *Topik*, Neuntes Kapitel: 103 b.

ライプニッツに於ても、命題は凡て主語述語命題であると共に、それは當然存在に拘るところのものであり、從つて存在命題としての主語述語命題でなければならぬのである。然しながら既に述べた如く、述語の一切が主語の内に含まれて居る限り、主語述語命題は分析命題であり、その主語には何等現實存在の制約はない。従つて、かゝる主語から分析的に導出される述語の内には當然現實存在の主張がないとするならば、ライプニッツに於て、主語述語命

題が現實存在の主張を持ち得る爲めには、それはむしろその述語に於て、存在を綜合し來るところの綜合命題である
と考へなければならぬであらう。然し綜合的である限り、それは最早や分析的ではないのであるから、綜合命題の
主張にはその限り必然性を見出すことは出來ないのである。それ故に、假令存在の綜合がなかつたとしても、そこ
は何等の矛盾も生じないのであるから、それはむしろその意味で偶然命題とでも云ふべきものであらう。例へば、足
利義政は銀閣寺を建てた、と云ふ命題は明らかに存在の主張を含んで居るところの存在命題である。然し足利義政が
銀閣寺を建てなかつたとしても、それは論理的には何等自己矛盾を含むものではないのである。それ故にライプニッ
ツに於ける主語述語命題は、分析命題から區別する意味ではむしろ以上の如き綜合的偶然的な存在命題であると云ふ
ことも出來るであらう。

然しながら、ライプニッツに於て、個體的實體 (*la substance individuelle*) と稱するところのものは、かゝる存
在命題の主語となるところのものであると共に、それは再び他の主語の述語とはならず、却つて多くの述語を自己に
歸屬させ得るものであつたのである。「形而上學敘説、八、」常に主語であつて、述語とはならないかくの如き主語とは
一體何であらうか。我々は凡ての命題が結局に於て主語述語命題に還元し得ることを假令認めるにしても、かゝる意
味の主語を分析的に把握することは最早や出來ないのである。それ故に我々は今や、以上の如き綜合的偶然的と稱せ
られるべき存在命題そのものゝ構造をより深く究明し把握することに依つて、同時にかゝる意味の主語の何であるか
をも亦解明しなければならないのである。

アリストテレスの語義圖式 (Semantic scheme) に就て、ボヘンスキも「書かれた言葉は話された言葉の象徴 (symbol) であり、それは又精神的な経験の象徴である。そしてこの精神的経験は更に事物の象徴である……」と云ふやうに述べて居る。(Bochenski, Ancient Formal Logic p. 29) 事物は精神的な経験を通じて把握せられる。そしてこの精神的経験自身が既に事物の象徴であるとすれば、例へば直觀的表象の如きものも、既に事物の象徴であると云はなければならぬ。そして我々の言葉が、かゝる一切の我々の精神的経験に對應する象徴であると考へて來るならば、我々の言葉での名辭 (term) と稱するところのものも、結局は事物に對應する象徴であることになるのである。このやうに考へると、アリストテレスに於ても言葉は事物の存在に對應してその事物であることの「主張」を既にそれ自身の内に持つて居るものであると考へなければならぬであらう。何となれば言葉がそれに對應する事物に就いての主張を有しない時には、その言葉は無意味と化する外はないからである。

現在、一般に所謂普通の名辭で表現せられて居るところのもの、例へば「机」とか「椅子」とか云ふ名辭の如きは、「机は脚を持つ」と云ふ命題がさうである如く、却つて分析命題の主語となり、何等存在には關係なく、その述語を必然的に演繹することが出来るところのものであるかの如く解釋せられて居るのである。

然しこのアリストテレスの場合を考へても明らかなる如く、「机」と云ふ名辭は、かゝる單に抽象的な名前に止まることは出来ない筈である。「机」が名辭である以上は、それは既に事物の存在を象徴して居るのでなければならぬ。そこに於ては、假令直接に「これ」と指示することが出来ないやうな場合と雖ども、間接的には何等かの手段によつて、既にその事物の存在が「それ」として把握せられて居らなければならぬのである。従つて一般的に「机」と稱せられる場合に於ても、それは結局に於ては「その机」乃至は「この机」と云ふ意味のものに歸着しなければならぬ。

らないであらう。そしてこの「それ」とか「これ」とか云ふ代名詞は、事物の存在そのものを指示して居るのであるから、「この机」は實は既に「これは机である」と云ふ如きひとつの主語述語命題の上に構成せられて居るものと云はなければならぬのである。

一般に、名辭は命題の要素であると云はれて居るのであるが、然しこのやうに考へて來ると、名辭自身が既に命題的構造を持つて居ることが明らかとなるのである。かくて「机」は「この机」であり、そして更に「これは机である」と云ふ主語述語命題の構造を持つことになるのである。そして「これ」と云ふ主語は、論理的な主語と云ふよりはむしろ事物そのものの存在であり、「机」と云ふ名辭は常に命題の述語の置位を取るのであつて、それは明らかに存在を綜合し來るところの存在命題と云ふことが出来るであらう。そこに於ては主語の置位にある「存在」は述語との統一の内に表現されて居るのであつて、述語は主語と結び付いて主語の主張を荷ふと云ふことに依つてのみ、主語の、即ち存在の象徴としての意義を持ち來るところのものと云ふべきであらう。それ故に、かゝる存在命題に於ては、存在が主語述語統一の内に自己を顯はにし來ると云つても、それは直接に存在そのものを顯はにするに云ふことではなくして、「存在」の主張が、主語の表現であるところの述語に於て統一的に現はれて來ると云ふことなのである。この場合主語の主張は、述語に與へられた「意味」となるのであつて、述名辭と稱せられて居るところのものは、かゝる「意味」を荷つて現はれて來たものと云ふことが出来るのである。かくて「存在」が主語述語形式を媒介として述語に意味を荷はずと云ふことが、若し命題と稱するものの意義であるならば、存在を象徴化すること、換言すれば述語の置位に於て「名辭」を形成することは、以上の如き存在命題に於てはじめて可能であると云ふことが出来るのである。そしてこの場合、特に注意すべきことは、名辭とはかゝる存在命題を通じて、主語の置位にある「存

在クを以上の如くして述語の限定形式にまで綜合して居ると云ふことである。名辭は、その形式の故に限定的ではあるが、この限定せられた形式に於て存在を綜合することに依つて、この限定を超えてク存在の表現クを實現し來るのである。それ故にク存在の表現クとは、存在命題の主張内容となるものであり、存在命題の意味するところのもの、即ちク意味クそのものでなければならぬのである。従つてク意味クは最早や述語に於て、その限定的形式を超えるものと云はなければならぬ。それ故に名辭とは、それがク意味クを荷つて居るものである限り、限定せられて居て限定せられて居ないものであるとでも云ふべきか。ク存在クは常にその主語の置位に位し、そして常に述語の置位の名辭に於て、自身を表現することになるのであるから、この述語たる名辭は、その限定的表現に於て同時にそれを超える表現を荷ふものと云はなければならぬであらう。この事は重要である。

*

又このやうに考へて來ると、一方に於て主語であるところの存在は、常に述語に於て自からを名辭として表現するのではあるが、然し既に述べた如く存在それ自身が述語の置位に就くと云ふものではない。それ故に假令へ主語述語命題に於てクそれクとかクこれク等の如く對象的な表現が行はれて居るとしても、それは最早や決して述語的な規定の内にクあるクことが出來ないと云ふことは注意すべきことである。それにも拘らずクそれク又はクこれクと云ふ指示的代名詞を用ひてかゝる命題の主語を表現すると云ふことは、存在が本來個體的なるものとして把握されて居るに外ならないからであらう。さればこそ存在は、述語に於て述名辭として綜合的に表現せられクこれは花であるクと云ふ如き存在命題が成立するのであつて、存在は明らかにクこれクと云ふ主語の置位に於ける個體的存在である。而も個體的存在は、それ自身としては、既に何等述語的なるものではないのであるから、個體と云つても決して數的な個別

性を持つ如きものではない。まして個體的存在を主語の置位に於て考へる場合、それは内包的なるもの集合 (aggregate) と考へることも出来ないものである。しかもかゝる意味の個體的存在が、常に述語に於て綜合せられるのであるが、既に述べた如く存在命題の述名辭は自からの持つ被制限性の故に、再びこの被制限性を超えて行かなければならぬのである。この事は主語の置位にある個體的存在が、元來限定し得られる如きものではないと云ふことに起因するのであつて、本來限定し得ない個體的存在を主語とする以上は、存在命題の行ふ述語的限定は、たゞその限定を超えて更に新らしき述語的限定を加へて行くと云ふことによつてのみ、個體的な存在を述名辭へと綜合することを可能ならしめると考へるより外はないのである。

述語的限定に更に述語的限定を加へて行くと云ふことは、例へばひとつの個體的存在々これを表現する存在命題の述語々人間であるクに對して更に々可死的なるものであるクと云ふ述語的限定を加える如きことでなければならぬであらう。そしてこの二つの名辭は、夫々々これは人間であるク、これは可死的なるものであるクと云ふ存在命題の述名辭であるが故に、以上の如く述語的限定に述語的限定を重ねると云ふことは、々れば人間にして、可死的なるものであるクと云ふふうに兩者を結合して主張すると云ふことでなければならぬ。然しながらこの場合、人間クと云ふ述名辭と々可死的なるものクと云ふ述名辭との、このやうな結合の仕方に就いては、我々は分析的には何等必然的な關係も見出すことは出来ないが故に、その限り偶然的であると云ふより外はないであらう。しかし、この二つの述名辭は共に共通の個體的存在を主語とする述名辭であり、既に述べた如くその根據を何處までもこの個體的存在自身の内に持つところのものであるが故に、それらの結合も亦その根據をこの個體的存在の内持つものであり、従つて個體的存在に就いての述語に更に述語を重ねて行くこの結合はア・プリオリであると云はなければならぬ。

あらう。しかもこの命題の述語であるところの \forall 人間にして、可死的なるものである \forall と云ふ結合の仕方は、既に述べた如くその最初の名辭の表現を否定し、その制限性を超えて行くところのものでなければならぬが故に、それは最早や算術的和 (disjunction) 乃至は性質の共通性 (conjunction) を示す如きものではないと共に、そこには何等分析的な、従つて一方が他方の性質を含むと云ふやうな包含的な關係 (implication) も亦、決して見出すことは出来ないのである。其故に制限を越え行くところの存在命題の述語を、以上のやうに表現することは、それ自身不完全であることを免がれることは出来ないであつて、この場合我々はむしろ人間は可死的なるものである \forall と云ふ形式の命題によつて表現するのである。しかしこの形式も最早や分析命題のそれであることは出来ない。 \forall 人間 \forall は何故に \forall 可死的なるもの \forall でなければならぬか？ それは \forall 人間 \forall なる主語から分析的に導出することは出来ないのである。其故にこの命題の主語は、最早や可死的と云ふ性質を含むところの一つの集合ではなくして、却つてそれ自身既に存在命題の主張内容を表現する述名辭であつたからである。

換言すれば元來述名辭であるところの \forall 人間 \forall が、他の述名辭 \forall 可死的なるもの \forall と結合せられて、再び一つの新らしき述語 \forall 人間は可死的なるものである \forall にまで統一せられたものと云ふべきであらう。そしてその主語となるものは、まさにこの兩名辭の共同の主語である個體的存在そのものでなければならぬのである。(この點かの \forall これは人間にして、可死的なるものである \forall と云ふ命題と同一構造に歸するものと云ふことが出来るであらう) 従つて \forall 人間は可死的なるものである \forall と云ふ命題は、一見、存在命題としての形式を持たないかのやうに見えるのであるが、却つて存在命題のより高次の述語を形成して居るものであると云ふことが出来るであらう。しかもそれは同時に、主語の置位にある名辭を、述語の置位にある名辭に於て綜合することによつて、前者の限定形式を解消し超え行

く形式である。ク人間は可死的なるものであるクと云ふこの存在命題に於ては、人間と云ふ名辭はそれ自身個體の表現であると云ふ點ではク可死的なるものクと云ふ名辭と同様であるが、しかしク人間クと云ふ形式を棄揚してク人間は可死的なるものクと云ふ主張内容にまで個體の表現形式を綜合し具體化したのである。かくて個體は、存在命題に依つて、その表現の持つ被制限性——しかもこの被制限性の根拠はたゞ存在命題それ自身の内に求めるより外はないのであるが——を更に超え行くのである。

*

それ故に存在命題と云ふものは、例へば分析命題の如く、それ自身一個の主語と一個の述語とから成立して居る如き靜的 (Static) な姿に止まることは出來ず、それが存在命題である限り、以上の如くして次々にと新らしき述名辭を綜合するといふ多様な姿を持つものと云ふべきであらう。この多様であると云ふこと、即ち次々にと新らしき述名辭を綜合し來ると云ふことは、存在命題自身が既に一種のク多性ク (multiplicity) を持つて居ると云ふことである。それは、存在命題が個體的存在を述名辭に於て綜合する仕方とでも云ふべきものであつて、この多性の故に、存在命題にとつて、はじめて個體的存在の表現が可能となると考へるべきものである。それ故に、若し存在命題自身にかゝる意味の多性を認めないとすれば、存在命題は抽象化せられて仕舞ひ、最早や個體的存在の具體的表現は不可能となるであらう。

ライブニッツも「ク多ク (multitude) はその事象性 (réalité) を本當のクク (unities) からしか仰ぐことが出來ない……」(新説、三、河野譯、單子論岩波文庫版六二頁「但原語筆者挿入」と云つて居るのであるが、此の場合存在命題の多性は直接に主語たる個體的存在に發するものであると表現するはか致し方のないものであらう。存在命題が常に多

性を以て展開されて行くと云ふ事實に於て個體的存在が具體的に表現せられて行くのであり、この意味で個體的存在に對して存在命題の主張は常に對應 (correspond) して居るのであつて、それ故にこそ、存在命題自身が持つて居るところのこの多性の根據は、むしろ却つて個體的存在そのものに求めなければならなかつたのである。かくて個體的存在は、自からを主語とする主語述語命題に、更に同じく自からを主語とする命題を重ねることに依つて、換言すれば自己を表現する述名辭に更に他の新らしき述名辭を結合することに依つてのみ自からを表現し來るのである。しかも既に述べた如く、名辭と稱するものは既に存在命題であり、存在を綜合して居るところのものであるが故に、ひとつの個體的存在は、以上の如くして他の述名辭を結合して行くことに依つて、即ち他の個體的存在を次々に綜合し來ることに依つて、はじめて完全に表現せられるところのものでなければならぬ。個體的存在は、存在命題のこの多性に於て、はじめて表現せられるのである。それ故に、例へばクアダムクと云ふ名辭によつて表現せられる個體的存在は、自からを表現するこの名辭に於て、既に存在命題の構造を持つものであつた。従つてクアダムクと云ふ名辭の主語である個體的存在は、クアダムクと云ふこの名辭に更に他の述名辭を結合することによつて、換言すれば他の個體を次々に綜合し、かくて總ての個體を綜合し盡くすことによつて、はじめて完全に表現することが出來ると云ふべきであらう。

然しながらこゝで注意すべきことは、述名辭に更に述名辭を結合すると云つても、それは最早や述名辭の數量的な總和の如きものを要求して居るのではないことは既に明らかである。其故に總ての個體を綜合し盡くすと云ふことも、實は前述の手段によつて個體的存在を述語の内に於て完全な豊富さをもつて表現すると云ふことではなければならぬと云ふことである。

(三)

今や我々が命題と稱し得るところのものは、凡て述名辭に於て存在を綜合するところの存在命題でなければならぬ。そして我々は存在命題を持つ限りに於て、個別的に個體を把握することになるのである。この意味からすれば、存在命題の存する限り、それだけの個體が把握せられると云ふべきであらう。然しながら嚮きに述べた如く、存在命題それ自身が既に多性々を持つものであつた。従つて存在命題をいくつある々と云ふふうには抽象化するとは最早や無意味であるが故に、個體的存在の如きも亦數的に數えられる如きものではないのである。それ故に我々は存在命題の主語に於て、既に個體的存在を把握して居るのであると共に、我々はたゞ存在命題を媒介とする時、かゝる個體的存在以外の如何なるものも表現することは出来ないと言ふより外はないのである。

従つて、我々の認識するあらゆる現實的存在と云ふものは、實はこの個體的存在を述名辭へと綜合することに於て、そこに表現せられるところのものに外ならないと云ふべきである。換言すれば、それは絶えず存在命題の上に存在命題を重ねて行くことに於て、即ち存在命題の多性々に於て表現せられるところの個體的存在の姿でなければならぬのである。

然しながら、常識的には我々のあらゆる現實的存在とは、時間乃至空間の内に於ける存在であるかの如く考へられて居る。然し、かゝる時間空間とは一體何であらうか？ 若しさきに時間空間の如きものがあつて、その中に個體が存在すると考へるならば、個體は既にかゝる時間空間の内に順序付けることが出来る筈である。然し個體は數的に數えることすら無意味であつた。如何にして、かくの如き時間空間の内に系列を持つことが出来るであらうか？

我々の把握し得るものは、たゞ存在命題を媒介としての個體以外にはなかつたのである。それ故に我々は上述の如き存在命題の多性に於て、即ち存在命題を重ねて行くと云ふことに依つて、他の個體との關係をも述語の置位に於て綜合し來るのであり、こゝに於て寧ろ時間や空間なるものゝ姿さえも述語的に捉え來ると云ふことが出來るであらう。蓋し存在命題を重ねて行くと云ふことは、一つの述名辭と他の述名辭とを結合して行くことであつて、この結合に依つて個體的存在は、一層具體的な表現を得るに至るのであることは既に述べたところである。そこでは又、個體的存在の述名辭は既に他の個體の述名辭とク何等かの關係に於て結合されて居ると共に、このク關係クそのものも亦、述語化せられて居ると云はなければならぬ。クこれはAであるク、クこれはBであるクと云ふ二つの存在命題は、例へばクAはBよりも先きであるク（又はクAはBより大きいク）と云ふ命題にまで結合せられるのである。そこに於てはAもBも共に個體名辭であると共に、クよりもさきであるク（又はクよりも大きいク）と云ふ關係も亦既にAなる主語の述語となつて居るのである。

このやうに考へると、個體を表現する一つの述名辭と他の同じく個體を表現する述名辭との關係が、換言すればその個體に關してのみ單にク前クである述名辭と單にク後クに來る述名辭との結合關係が、再びその個體に就ての述名辭として主張せられることになるわけである。我々は今、前の述名辭と後の述名辭とを區別して述べて居るが、實際はこの區別すら無意味であらう。たゞ存在命題の主語と、更に重ねられた存在命題の主張との關係を述語化して、ク前クとかク後クとか稱して居るに過ぎないのである。それ故に個體が表現せられる場合、その述名辭の内には必然的に以上の如き個體間のク關係クが含まれて居るのである。それ故に時間空間とは、その内に個體が存在する如きものとしてではなくして、むしろ逆にその述名辭間のク關係クとして再び述名辭の内に具體的に表現せられて來るもの

であると言ふべきであらう。

かくて存在命題の多性は、時間空間をも既に個體的存在を表現せんとする述名辭の内に捉えて居るのである。それ故にこそ個體的存在は常に時間的空間的な表現を持つところのものであると云ふ外はないであらう。しかもこの時間空間的表現はたゞ、存在命題の述語に於てしか表現せられないものであるが故に、その限りその主語であるところの個體的存在は常にクこれクであると共にクこゝクでありクいまクであるものとして主語の置位に就くものと云ふことが出来るであらう。勿論クこゝクとかクいまクとか云ふ指示代名詞的な表現は、クこれクがさうであつた如く、あくまでも何等述語的な表現ではないけれども、クこれクと同様に、まさに個體的存在の性格を物語るものと云ふことが出来ると共に、このことは幾くたびも述べた如く、個體的存在を存在命題の主語の置位に於て既に具體的に把握して居ることを意味するものであると云ふことが出来るであらう。たゞ我々は存在命題の多性の展開に依つての外は、それを述語する手段を知らない。我々はたゞ上に述べた如き時間的空間的な何等かの關係のもとに、個體的存在を次々にと述名辭へと綜合する、そしてその限りに於て我々は個體的存在をその現實的存在の姿に於て表現することが出来るのである。

(四)

既に述べた如く存在命題は、その主語であるところの個體的存在を表現するところのものである。それは存在を述語へと統一することであつた。その場合、存在命題は次々にと新らしき述語的統一を齎らすことに依つて、個體的存在の表現を具體化する。存在命題のこの多性の根拠がク存在クにあると云ふことは既に明らかである。そして

ク存在は、存在命題のク多性を通じて、存在命題の持つ制限性を超えて個體的存在のより深き具體性を表現し來るのであるから、この意味で、即ち存在命題がク多性を持つ限りに於て、個體的存在は述語に於てク動的（dynamic）従つて連続的に表現せられて來ると云ふべきであらう。即ち個體的存在の述名辭的表現は絶えず動的に行はれるのであつて、それは常に一定の方向を、即ち存在命題の持つ制限を越えると云ふことによつて、その述語的表現が連続的であり個體的存在のより深き姿——より深き現實性を把握して行くと云ふク方向クを持つて居ると云はなければならぬのである。この事は既に主語の分析から得られる如きものではないとは雖、ア・プリオリの根據を持つものである。それ故に個體的存在がより深き現實性に於て表現せられて行くと云ふこと、従つてク多性の展開と云ふことは、今や必然的でなければならぬ。そして存在命題の持つク多性がこの方向に向つて表現を持つ場合、こゝに存在命題のク眞なることが主張されることになるのである。それ故に命題がク眞々であると云ふことは、個體的存在のより深き現實性の表現へと存在命題の多性が向つて居ると云ふことである。こゝに至つてク眞々自身にも亦ク動的クな深さがあると云ふことになるであらう。然しこの事からして直ちに絶對的な眞、即ち個體的な存在の完全なる表現に對して無限に近付くことが可能であるとか、又はその爲めには無限の時間的過程を必要とするとか云ふふうに考へてはならない。元來存在命題は、存在をその絶對性に於て表現しない限り、その多性の展開をク動的クに進展させて行くこと考へるべきであらう。然し既に述べた如く時間空間の動的（従つて具體的）表現すらも、この多性の動的進展によつてこそ可能となるのであつて見れば、この多性の動的進展を再び抽象的な時間の内に於て考へること（無限の時間を必要とするとか云ふふうには最早や意味がないし、又多性の展開の結果としての個體的存在の完全なる表現を、述名辭に於て得られた知識の數量的總計（完全なる知識に無限に近づくことによつて得られる如き）に求めることも出來な

いのである。然しながら兎も角くも既に個體的存在は把握せられて居るのであるから、存在命題の多性の展開に依つてそれを述語的に表現することは可能であると考へることも亦出来る筈である。然し最早やその場合には、この事は現象的な時間空間を超えてのみ可能である——即ち動的々へのみ可能である——と云ふより外はないであらう。

この事は又存在自身にその充分なる根據を持つて居るのであつて、(我々にとつてこそ偶然的と見えるとは雖)その限り、それはア・プリオリであり、従つてク真々が動的々な深さを持つといふことも亦必然的なのである。そこには我々の恣意の如きものの入り込む餘地は全然ないのである。

かくて存在命題の多性の展開が必然的であり、そしてそれが以上の如くク真々であることの主張を持つ限り、それは矛盾律に従ふものでなければならぬのである。

即ち存在命題の主張がク真々であると云ふことは、それが存在に根據を持つものであり、存在を綜合せんとして必然的に展開する多性の方向に對して云はれることであつた。従つてク真でない々と云ふこと、即ちク偽々であると云ふことは、命題の主張が存在を綜合して居ない場合であつて、その場合には命題は既に存在命題であることを止めるのでなければならぬのである。それ故に存在命題に於て、その主張が偽であると云ふことは、その主張が最早や存在に根據を持たないと云ふことであつて、分析命題の場合の如く、單にその主張のみを否定するに止まるものではないのである。分析命題の場合に於ては、矛盾律は $(X \vee \neg X) \equiv \text{真}$ で表はされる。その意味するところは、クXであるを主張すると同時に、クXでないことを主張することは偽(F)であると云ふことである。こゝで注意すべきことは、クX々と云ふ記號はクXでない又はクXは偽であると云ふ積極的主張を既にそれ自身の内に持つて居ることの表明であると云ふことである。ク今日は晴天である々とク今日は晴天であるのではないとはお互いに矛盾する命

題であると云はれて居る。そこに於ては一方の偽は、他方の眞なることを主張して居ることに外ならないのである。従つてそこには前者の否定から後者の積極的な主張、即ち今日は晴天以外の天候であることが眞として主張される餘地が残つて居るのである。即ちかゝる分析命題に於て否定されるものは、述語であつて、その主語ではないのである。従つて元來分析命題に於ては、矛盾律は何等主語である存在に拘はるものではなく、たゞ述語にのみ關して云へるところのものに過ぎないのである。

然るに存在命題に於ては、その必然性は存在に依存するものであるが故に、矛盾關係はたゞ存在に拘つてのみ主張され得るところのものであつた。Xなる存在命題は、それが存在に拘る限り存在命題として眞である。そして偽であると云ふことは、それが最早や存在に拘らないと云ふこと、即ち存在命題として成立しないと云ふことであつた。従つて、 X は眞である X と X は偽である X とが矛盾關係にあると云ふ場合、 X が偽であると云ふことは、 X が根柢的に既に存在命題として成立しないと云ふことである。例へば X 花は美しい X が偽であるとすれば、最早やかゝる命題は存在命題として成立しないと云ふことである。それ故にその場合には、 X 花は美しい X と云ふ命題に就いて論ずることは最早や無意味となるのである。存在命題に矛盾する命題は、最早やそれを思惟することは出来ない。存在命題はそれが存在に根據を持つ限り、眞である外はあり得ないのである。 X 足利義政は銀閣寺を建てた X と云ふ命題は、それが存在に根據を持つ限り眞であつて、その矛盾命題即ち X 足利義政は銀閣寺を建てた X は偽である X と云ふことは、その限り思惟することが出来ないものである。我々は、足利義政は銀閣寺を建てなかつたと云ふことも可能であるとして思惟することが出来るといふかも知れないが、然しこのやうな命題は最早や存在命題ではないのである。何となれば X 足利義政は銀閣寺を建てた X は偽である X と云ふ命題が存在にその根據を持たない限り、最早や

如何なる形に於ても積極的な主張であることが出来ないからである。従つて又足利義政は銀閣寺を建てないと云ふことも、右の命題を根據としては積極的に主張することは出来ないのである。たゞ存在から抽象した記號の集合の如きものを考へる時には、そこに分析命題の形式を構成することが出来るが故に、主語と述語の包含關係に就いて、明らかに形式論理學的矛盾律が適用せられる。そこでは既に述べた如く足利義政は銀閣寺を建てたに對してその矛盾命題々足利義政は銀閣寺を建てなかつた々と云ふ主張がたゞ並立 (conjunction) しなすと云ふことのみが主張されて居るに過ぎない。しかしこの二つの命題は、共に最早や何等存在には拘つて居ないのである。それ故に、存在命題が一般に偶然命題であると稱せられるところからして、その否定命題も亦ク可能であるクと考へることは、既に述べた如く存在命題自身を存在から抽象化して考へることであり、従つてそこには最早や何等の現實存在もない。

然し既に述べた如く存在命題は多性を持つと共に、その展開には方向があつた。この意味では存在命題に關して可能性なるものを考へることは出来る。例へば世界歴史に於て、今後何事か展開すると云ふことは可能である。然し我々がその具體的な事實の主張を、現實の世界事情から分析的に矛盾律に従つて導出することは出来ない。存在命題の多性の方向は、たゞ存在にのみ依據するものであり、従つてそれは存在命題の綜合のみが決定する問題であるからである。存在は存在命題の主語として、個體的存在であつた。それは存在命題の多性の根據である限り、存在命題に依つて綜合せられることを何處までも可能ならしめるところの可能性を、たゞ存在命題に對してのみ、有意義のものとして持つて居ると云ふことが出来るのであらう。それ故にこそ、存在命題は自からの多性を通じてのみ、個體的存在の内に見出すこの可能性を絶えず何處までも必然的に現實化しつゝあると云へるのである。

存在命題とは、むしろかゝる意味で個體的存在の内に見出し來るこの可能性の爲めに制限せられて居り、この制限

を否定し超えて行くところにこそ、却つて現實的存在を動的、乃至は連續的に捉えて居ると云ふことが出来るであらう。その方向は、より深き現實性、より深き眞理の展開にあることは既に述べたところである。

(五)

然しながら、若し之に反して存在命題に何等の多性々をも認めないとするならば、個體的存在は直ちにその動的表現を喪失し、抽象化して仕舞ふであらう。そこに於ては個體は尙ほ主語述語命題の「これ」と云ふ論理的主語に止まることは出来るかも知れないが、然しかゝる主語を述語する場合、それは主語の單に靜的 (Static) 斷片的な表現に止まり、最早や何等動的なるもの、連續的なるもの、を表現することは出来ない。従つてそこに於ては時間空間の如きものも、かゝる抽象化された主語——かゝる主語は最早や數的にのみ存在し得る外延的存在に過ぎないのであるが——の述語として單に數的なるものの秩序付けを意味するに過ぎないものとなるであらう。それ故に靜的な述語は、最早やいくら重ねてもそれは何處までも單にかゝる述語の數的和であるに過ぎず、そこには少しも動的なるものを見出すことは出来ないのである。それ故に、時間空間は述語的に表現せられると云つても、それは最早や外延的存在の述語であつて、云はば數的存在を秩序付けること以外には如何なる必然的な關係をも表現するとは出来ない。それは全く時間空間に就いての抽象された姿であると云ふ外はないであらう。

このやうな立場からすれば、述語し得るものは常に異なる時間點に於ける述語であつて、その主語たる外延的存在の同一を證すべき如何なる根據をも我々は持つことが出来ないことになるのである。まして夫々の外延的存在は、夫、單一的靜的述語によつてのみ表現せられるところのものでなければならぬと云ふことを考へるならば

諸々のかゝる抽象的命題の主張するところの夫、の存在の集合の間には、一體如何なる關係が成立すると云ふのであらうか？ 例へばこれはインキ壺である々と云ふ如き一つの主語述語命題が靜的に考へられる場合には、その主張するところは單に抽象的である。即ちインキ壺はインキ壺であつて、それ以外の何者でもないと云ふことである。それは最早や原因でもなければ結果でもないのである。

このやうに命題が靜的である場合には、主語としての外延的存在の多數性の故に、主語が述語を持つと同じだけの命題が存在することになる筈であるが、それ等の集合は、今や時間と云ふ繼起的秩序によつて繋がれたフィルム of 畫面の如き關係にある。そして、それが映寫された場合、そこに動的な状態が表現せられる如く見えるけれども、それは實は何處までも斷絶せる靜的な一コマの状态の數的、従つて抽象的な時間的前後關係に於ける集合に過ぎない。主語たる外延的存在の多數性が時間の内に述語せられるとしても、それは何處までもかゝるそれ自身獨立の靜的命題の主張が、互ひに内的には何の交渉も持つことなくたゞ抽象的時間の順序に従つて集合せしめられたものに過ぎない。現在の状態は今、存在し、そして次の時間には最早や存在しない。一般に現象と稱せられて居るところのものが、時間の内に於ける現象であると考へられる場合、それは恐らくかゝる靜的命題の主張内容の抽象的時間に於ける順序付けに過ぎないであらう。例へば物理的な運動の概念の如きも、時間と空間とに關する函數關係によつて表現せられるのであつて、現象としてのこの運動は、この函數の變數に値が與へられることによつて靜的のみ表現せられるところのものゝ集合として把握せられるところのものに過ぎない。それは運動の軌跡と稱するところの點の集合であるかも知れないが、そこには動的なるものゝは少しも表現せられて居ないのである。

既に疾く述べた如く、存在命題に於て存在がその述語に於て綜合せられると云ふこと。即ち存在が述語されると云

ふことは、存在が個體的存在として持ち來る現實性の發現を意味するのであつた。我々が存在命題に於て述語的に捉へるところのものは、直接に具體的な現實的「動き」(物理的運動ではない)そのものであつた。主語が存在である限り、述語的に表現せられるところのものは、かくの如き現實性である。それは如何なる意味に於ても靜的な述語の複合せる如きものから發現し得るものではない。靜的斷面的な述語を重ねれば重ねる程、益々スムーズに動くかのように見えるかも知れないが、それは決して現實的な「動き」ではないのである。ましてかゝる靜的な述語の主語である。外延的存在の如きものに、假令へ何等かの能力(例へば活動性の如き)を賦與し得たとしても、それ等は凡て時間の述語へと必然的に還元せられて仕舞つて、そこからは如何なる現實的「動き」も現はれて來ないであらう。現實的な、意味々を持つと云ふこと。それは個體として把握せられて居る「存在」を表現することであつて、この事はたゞ存在命題の述語に於てのみ行はれるところである。この述語の内に於てこそ、他の個體の表現が關係的に述語化されて現はれて來るのであつた。抽象的靜的命題の主語である「外延的存在」は互ひに對立的であるが、今や存在命題に於ては個體に絶對的に對立する他の個體と云ふものを考へることは出來ない。個體的存在は、既に數的に異つて居るのではないから、個體は他の個體の存在によつて限定される如きものではない。従つて又個體があつて、それを述語すると云ふ如きものでもない。「存在」は、存在命題の主語の位置に個體的存在として既に把握せられて居る。そして我々はたゞ述語の表現する「意味」の内こそ、それを現實的存在として捉え來ると云ふべきであらう。